

アートを探求

AICHI
ARTS
CENTER

by 愛知芸術文化センター

AAC Journal

2025 WINTER

Vol. 126

家族がつないだ画家の夢



フィンセント・ファン・ゴッホ《画家としての自画像》 1887年12月-1888年2月 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム（フィンセント・ファン・ゴッホ財団） Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

ゴッホ展

ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢
フル・オーケストラを凌駕するほどの演奏を5台ピアノで
虚ろな陶造形に身体性を見出す西條茜
劇場とダンス 日常にささやかなダンスとの出会いを

2026年1月3日(土)～3月23日(月)
NHK名古屋 放送100年記念
中日新聞社創業140年記念
ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢

場所／愛知県美術館 時間／10:00～18:00 ※金曜～20:00(入場は閉館の30分前まで)
休館日／1月5日(月)、1月19日(月)、2月2日(月)、2月16日(月)、3月2日(月)、3月16日(月)
料金／一般2,000円(1,800円)、高校・大学生1,300円(1,100円)、中学生以下無料
※()内は通常前売料金です。団体料金はありません。
※上記料金で本展会期中に限りコレクション展もご覧になれます。

お得な限定チケットも販売中
詳細は展覧会公式サイトで！



拝啓、星になった兄さん

フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)の作品は、今日までどのように伝えられてきたのでしょうか。本展は、ファン・ゴッホ家が受け継いできたファミリー・コレクションに焦点を当てます。

フィンセントの画業を支え、その大部分の作品を保管していた弟テオ。兄の死の半年後にテオも亡くなると、その妻ヨーは膨大なコレクションを管理し、義兄の作品を世に出すことに人生を捧げます。テオとヨーの息子フィンセント・ウィレムは、コレクションの散逸を防ぐためにフィンセント・ファン・ゴッホ財団を設立し、ファン・ゴッホ美術館の開館(1973年)に尽力します。人びとの心を癒す絵画に憧れ、100年後の人びとにも自らの絵が見られることを期待した画家の夢も、数々の作品とともにこうして今日まで引き継がれてきました。本展をとおして、家族が受け継いできた画家の作品と夢を、さらに後世へと伝えていきます。



左. フィンセント・ファン・ゴッホ《羊毛を刈る人(ミレーによる)》1889年9月
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

右. フィンセント・ファン・ゴッホ《オリーブ園》1889年11月
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



スタッフのオススメ関連本! **ART LIBRARY**

ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲル
画家ゴッホを世界に広めた女性

ハンス・ライテン／著、川副智子／訳 NHK出版、2025.6

ゴッホの義妹・ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲルの功績と生涯を描いた評伝。フィンセントの作品管理及び普及に尽力した彼女の道のりや背景を、貴重な資料・図版とともに全18章でたどる。

石崎学芸員



愛知県芸術劇場

フル・オーケストラを

凌駕するほどの演奏を5台ピアノで

新潟、三重で人気を博した重厚な音と美しく繊細な音色を奏でるコンサートが愛知県芸術劇場コンサートホールに登場します。舞台上にはスタインウェイ2台、ベーゼンドルファー1台、ヤマハ2台のピアノが並び、その姿はまさに圧巻! タイトルにある「ツィルクス」とはドイツ語でサーカスの意。白石光隆、田村緑、中川賢一、デュエットウ かなえ&ゆかりの5人のピアニストによる50本の指が鍵盤上を激しく躍動し、披露される超絶技巧はまさにサーカスのようです。5台のピアノならではの多彩で個性豊かな響きがホール全体を包み込みます。

〔曲目〕

- G.ホルスト(駒井一輝 編):木星
- C.ドビュッシー(加藤昌則 編):月の光(5台ピアノver.)
- 加藤昌則 編:ジョン・ウィリアムズ・メドレー
- G.ガーシュウィン(駒井一輝 編):ラプソディ・イン・ブルー ほか

〔出演〕



白石光隆
© Shouhei Yokoyama

田村緑
© Shigeto Imura

中川賢一
© Shuhei NEZU

デュエットウ ゆかり デュエットウ かなえ

2026年3月7日(土) ピアノ・ツィルクス～5台ピアノの世界 in 愛知県芸術劇場

場所／愛知県芸術劇場コンサートホール

時間／15:00～

料金／一般4,800円、[U25]2,500円

チケット／発売中

※[U25]は公演日に25歳以下対象(要証明書)。

※未就学児入場不可。

※「劇場と子ども7万人プロジェクト」

(小・中・高校生招待)対象公演。

詳細は
劇場WEBページで！



劇場

連携と変容、可視化される力の美しさ

自らが高い身体能力を備えたダンサーである三東瑠璃は、振付においても他に類を見ない身体的美学を打ち出している。4月に愛知県芸術劇場ダンスアーティストに就任以来、最初に手掛けた創作がパフォーミングアーツ・セレクション2025 フェスティバルエディションで発表された。三東ならではの世界観を凝縮した、美しく洞察に富んだ作品だ。

客席が地続きに設置された大リハーサル室のフロアの中央に、人の身体が絡み合った、ひと固まりの立体物がある。誰のものか分からない腕や足が複雑に入り組んだ固まりは、気が付くとわずかに動いていて、呼吸や脈動を滲えた生ある存在であることが分かる。やがて固まりは氷が溶けるようにゆっくりと、あるいは地層が動くような目に見えない速度で解れていき、密着していた4人のダンサーの姿が現れる。間近に見る身体のあり様が強く迫る上演だ。

密着が解けた後も4人は接触を保ったまま形態を変えていく。連携の外へ出て行こうとする身体があると、身体間に生じる張力がそれを引き留める。あるいは床に沈んでいく身体を他の3人が支え、引き上げる。ひねり、よじれ、大きな可動域で動くダンサーたちと、互いの間にはたらく身体のレジリエンス(回復力)。4人の連携が見えない力を可視化しながら、刻々と変容していく過程は美しい。ステップによる通常のダンスの概念とも、身体を物質と見做す立場とも異なる独自の作舞の方法により、見たことのない地平を切り拓くパフォーマンスに目を見張られる。

4人はしばしば目を閉じて、満ちてくる感情やエネルギーの流れを受け止める。展開に筋書きはなく、瞬間ごとに

心を揺さぶり、思考が巡る、その場でしか味わうことのできないもの。

選び取った動きが次の動きを生んでいくが、それを可能にしているのは互いへの信頼と、他の存在に対する全幅の肯定だろう。重力との関係、互いの身体の重さや温もり、内的なざわめきを瞬間ごとに感知しながら、定点のない関係性を生きるダンサーたちは、未知の時間に身を投じながら、同時に、より根源的な生の位相を生きている。

鍵盤楽器、クラヴィコードが繊細な音色を奏で、上演に伴走する(内田輝、演奏も)。コードのある音楽が不定形な身体の営みを意味あるものになっている。

竹田 真理さん Mari Takeda

コンテンポラリーダンスを中心に取材執筆するダンス批評家。関西を拠点とし、愛知県芸術劇場のダンス・プログラムにも足繁く鑑賞に訪れている。



© HATORI Naoshi

愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama×メニコン シアター Aoi
パフォーミングアーツ・セレクション2025
Festival Edition 三東瑠璃『満ちる』

2025年10月30日(木) 場所／愛知県芸術劇場大リハーサル室

クリスマスのオルガンコンサートを 愛知県芸術劇場オルガニストが紹介

今年の「クリスマスはオルガンだ!」は、長年、東京芸術劇場オルガニストとして日本のオルガン界を牽引してこられた小林英之さんにご出演いただきます。本場ヨーロッパのクリスマスを彷彿とさせる厳かな雰囲気、当劇場のオルガンをフルスペックに活用できる近現代の作品を中心にお届けします。共演はルーテル学院大学講師で同大学オルガニストを務める湯口依子さんです。12月24日(水)・25日(木)は、みなさまと一緒に劇場で過ごせますように。

クリスマスはオルガンだ! 2025 〜オルガン・アンサンブルで聴くパイプオルガンの響き〜
2025年12月24日(水) 19:00〜・25日(木) 15:00〜 場所／愛知県芸術劇場コンサートホール



詳細は
WEBページで

愛知県芸術劇場オルガニスト
都築由理江



AACのWEBサイト・SNS・
音声メディアでは
芸術を気軽に楽しめる
コンテンツを配信!

こころのおやつ
AACタイム
by 愛知芸術文化センター

WEBサイトを
チェック



aac.time.aichi.jp

インスタを
フォロー



@aichigeibunaactime

ポッドキャスト
をきく



愛知芸術文化センターの
アートがもっと好きになるラジオ

もっと知りたいアート専門の図書館
ART LIBRARY
(愛知芸術文化センター1F)

アートライブラリーは、平日は19時まで開館しています! お仕事帰りにアートに触れてみるのはいかがですか? 最近話題の怪談や幽霊に関する書籍も所蔵しています! 思いがけない出会いがあるかも!?



デザイン／神谷直広、高木若菜(株式会社Rand)
編集／村瀬実希(MAISONETTE Inc.)、徳久千恵
印刷／長苗印刷

鑑賞 note



丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

栖鳳と名古屋に引かれた確かな補助線

近代日本画を語る上で欠かせない竹内栖鳳^{たけうちせいほう}、その画業を時系列に辿りながら「高島屋と栖鳳」「名古屋と栖鳳」「人物画への挑戦」「越前和紙と栖鳳」というトピックを挿入する構成。副題にもあるトップランナーとしての軌跡を名品で押さえつつ、作品に留まらない画家の多様な側面をトピックによって拾い上げていく。鑑賞性の高さは勿論、トピックによる視点の拡張により、名品展に留まらない知的好奇心を刺激される展示であった。

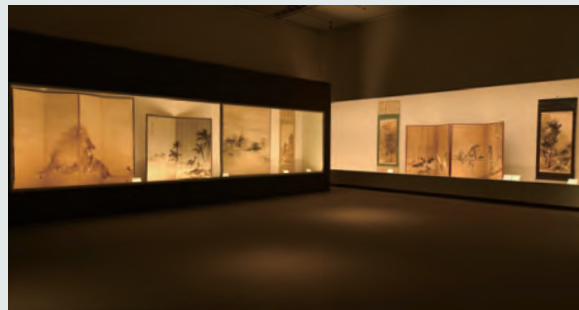
特に「名古屋と栖鳳」は、明治32年(1899)に愛知県で開催された全国絵画共進会出品作《秋風入林》(昭和美術館蔵)の来歴を丁寧に説く、本展が愛知県で開催されるべき意義を感じるトピックであった。後期展示では大正7年(1918)の第10回東海美術協会展に参考出品された第2回文展入選作《飼われたる猿と兎》(東京国立近代美術館蔵、明治41年[1908])も並置され、来館者は約100年前の名古屋の人たちが実見した作品を、同じ土地で追体験的に鑑賞できる。名古屋の日本画は、後述の石川英鳳^{いしかわえいほう}ら京都市立絵画専門学校の卒業生たちが帰郷した大正時代後期に急速な近代化を迎えるが、その前提となる土壌として、栖鳳ら京都画壇の画家たちとの継続的な交流や、作品の受容があったことを実感させる。

また、「越前和紙と栖鳳」のトピックでは、栖鳳の使用した画紙「栖鳳紙」の開発に際しての越前和紙紙漉き職人・初代岩野平三郎との関係が取り上げられる。本トピックでも間接的な栖鳳と名古屋の関わりが見て取れる。本展では名古屋の日本画家・石川英鳳が昭和3年(1928)に四尺七寸×二尺二寸(約142×66cm)の栖鳳紙を30枚注文

したとの書簡(福井県立美術館蔵)が展示されている。同年に英鳳は久邇宮邸天井画2点を描いているが、同邸の装飾には平三郎の関与が知られる。本書簡が天井画制作のための発注のものかは判然としないが、現在確認されている英鳳の戦前の軸物には紙本のものが少なくない。これらの作品の料紙が仮に栖鳳紙であれば、当代人気画家であった英鳳の栖鳳紙を用いた作品が、名古屋を中心に広く受容されていたことになる。そうした観点からも、栖鳳と名古屋に補助線を引いた本展の意義は極めて大きいのではないか。

近藤 将人さん Masato Kondo

名古屋市美術館学芸員。担当の常設企画展「近代名古屋の日本画界」は2025年12月7日(日)まで開催。



近代日本画のトップランナー 竹内栖鳳

2025年7月4日(金)～8月17日(日) 場所／愛知県美術館

お知らせ

Letter

詳細は
愛知県美術館
WEBページで!



2月から豊橋市美術博物館で開催!

愛知県美術館・愛知県陶磁美術館 移動美術館

愛知県美術館と愛知県陶磁美術館は、より多くの県民のみなさまにコレクションをご覧いただくため、県内各地に作品を運んで「移動美術館」を毎年開催しています。豊橋市で行う今回は、「クロスボーダー：越境する美術」をテーマに、アメデオ・モディリアーニや藤田嗣治、エミール・ガレなど、国内外の絵画や陶磁器を中心に約60点を展示します。人や物の「越境」に着目して、美術と工芸の歴史をたどる展覧会です。会期中には記念講演会やギャラリートークも行います。ぜひ会場へお越しください。

© 愛知県芸術劇場2025

※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。 ※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。 ※掲載内容は2025年11月18日(火)現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。

2025年12月1日号 Vol.126 発行・お問合せ／愛知県芸術劇場(公益財団法人 愛知県文化振興事業団) ☎052-955-5506 e-mail／mkt@aaf.or.jp(企画制作部)



街に出向き、劇場に足を運んでもらう、
コミュニケーションができる劇場へ

はじめまして、こんにちは。まつもと市民芸術館芸術監督（舞踊部門）の倉田翠です。私自身は、つい最近「劇場側」になった「劇場を利用する側」だった人間で、やっと「肩書きに慣れてきた」ところです。自分のことを少しだけ書きます。

私は生まれた三重の田舎で、幼少期からクラシックバレエを習い、ダンスと触れ合ってきましたが、京都の芸術大学で、身体に激震が走るようにコンテンポラリーダンスと出逢いました。その後、主に京都の小劇場を活動の場とし、自分にとって「ダンス」とは何なるだろうかと、正解のない答えを探るようにアルバイトと並行してダンス作品を作る日々を送りました。そのうち仕事をいただけたり、作品を買っていただけるようになったりと、公共ホールと仕事をすることがになりました。そんな折、「松本にある公共ホールの芸術監督になつてもらえないか」という話が舞い込んできました。非常に街に演劇が根付いています。そこに突然、何のゆかりもない私がダンスを背負ってやって来たわけです。この世界に居るとコンテンポラリーダンスの客層があるように感じますが、松本にはそんな幻想はありません。

得体の知らない自分が、劇場でじっと待っていて「見に来てね」ということには無理があると感じ、こちらから出合いに行こうと考え、街を知るには、とあえず飲食店かと。喫茶店や、居酒屋などに行ってお店の方

やお客さんとお話してみると、劇場を意識してくれていることがわかってきました。

「ここに小澤征爾さんが座つてね、写真一緒に撮ったの」とか今から〇〇見に行くよとか、お話をいただきました。また、街で「この前見たよ」とか、話しかけて感想を言うてくださったたりするんですね。さらに、おもしろいアートスペース、小さなライブハウスなどが結構ある。私はこの「顔を見て話せる距離」にある劇場と市民（観客）の近さ、街の狭さの可能性を感じました。松本の街で出会った人、劇場で出会った人、行った場所、松本外から来てもらった人、点のものが線になって少しずつつながってきている感覚があります。

一つ、嬉しかった話を。地元のアーティストの方が主催する一般の方向けにソロダンスを作るという企画を拝見しに行った際、参加者の方が「倉田監督の企画を見に行き、小暮香帆さん（東京を拠点とするダンサー）のダンスを見て、自分も踊りたい」と思いくこの企画に参加したんです！」と伝えてくださいました。松本に呼んだダンサーの踊りが、ここに住む誰かの「踊ってみよう」とつながったと思うと、胸が熱くなりました。そして、その想いを受け止める劇場には希望を感じています。小さなさやかなつながり、私が希望を感じています。コンテンポラリーダンスが地方で急に盛り上がる、ということとは、私はないと思っています。でも、こうして小さな点が街の方々の力を借り、少しずつ広がっていく気配を感じています。もちろん、話題の作品を観ていただくことも公共ホールの大切な仕事です。ただ、今出来ることは、人と人が出会うように、お客さまにダンスと出逢ってもらう機会を作ることだと思っています。気が合って仲良くなっても良いし、よくわからないけど面白い人（ダンス）を紹介したい。出逢つてほしいと本気で思える人（ダンス）を紹介したい。こんな面白い人が少ないよーと。実は、芸術監督に就任した時から、私は少年刑務所にクラブ活動の先生として月に一度通っています。ふと

スタッフのオスズのダンスの本！

ART LIBRARY

ダンスの歴史 ヴィジュアル版
宮廷ダンスからプレイキンまで
ロバート・ヒルトン／著、高尾菜つこ／訳
原書房、2023

人々がさまざまなかたちで展開してきたダンスについて、特に変容過程にフォーカスし読み解いた書籍。豊富な図版とともに、カドリアルから今日のヒップ・ホップまで、幅広く見渡すことができます。

愛知芸術文化センター管理課 アートライブラリー担当
三上昂良

navigator's COLUMN

国際芸術祭「あいち2025」の
キュレーターやスタッフが
アートの多様性を「あいち」から発信します。

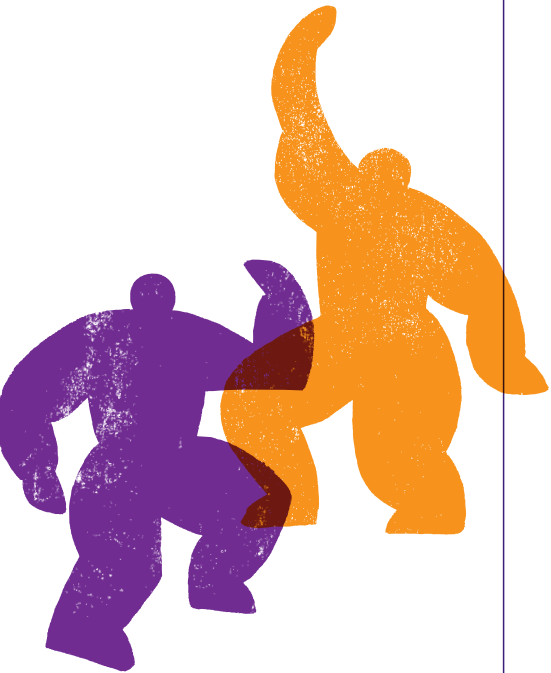
11月30日（日）をもって、国際芸術祭「あいち2025」が閉幕しました。みなさんお楽しみいただけましたでしょうか？ あらゆる差別や優生思想を許容しないというステートメントの発信や、クワイイベントやナイトミュージアムの実施、漫画家によるキービジュアルなど、「あいち2025」ならではの要素も盛りだくさんでした。また、まち歩きも含めてさまざまなかたちで「世ともの」のルーツに触れたのではないのでしょうか？ 次回は2028年、どんな芸術祭になるか、楽しみにお待ちください！



© タカギ コウゾウ
国際芸術祭「あいち2025」プロジェクトマネージャー
副田 一穂
（愛知県美術館 主任学芸員）



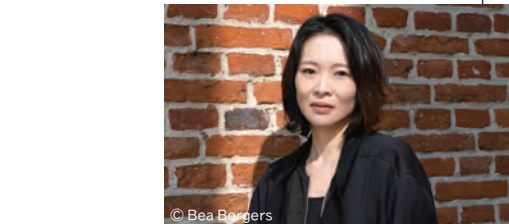
国際芸術祭「あいち2025」展示風景 ムルヤナ「海流と開花のあいだ」2019-
© 国際芸術祭「あいち」組織委員会



MORE DANCE

思ったのは、劇場と刑務所つて少し似ている、という感覚です。高い塀に囲まれ、関係がなければどんなに近くに住んでいる人でも中のことに関心を持ちません。入ってみないと、中何が起こっているかわからない。

この壁を越えるつて実は大変なことだと思うんですね。まつもと市民芸術館監督団のテーマにはひらいていく劇場」を掲げています。扉を開いて待つということではありません。まず出会いに行くこと。こんな人がいるのか、こんな体験ができるのか、と知ってもらうこと。そして少しずつ、まだ出逢ったことがないけれど、もしかしたらダンスを必要としている方々にダンスが届くよう、こちら側から出合いに行ける劇場でありたいと思っています。



Midori Kurata
倉田 翠
演出家 / ダンサー / akakilike主宰 / まつもと市民芸術館芸術監督（舞踊部門）
1987年三重県生まれ。京都を拠点に、演出家・振付家・ダンサーとして活動。自身や他者と向かい合い、そこに生じる事象を舞台構造を使ってフィクションとして立ち上げらせることで「ダンス」の可能性を探索している。
第23回AAF戯曲賞二次・最終審査員。

INTERVIEW

入澤（以下、入） 愛知県美術館が所蔵する《甘い共鳴》は、見ていると思わず顔を近づけたくなるような作品です。触覚性を誘発するのこのかたは、どのように生まれたのでしょうか。

西條（以下、西） 6つの金色の穴にいろいろな人がアクセスして、息を吹いたり声を出したりすることで共鳴させる作品です。作品の中で音が響く構造になっているのですが、作品自体も生物のようなかたちをしていて、物質であり人でもあるといったイメージで作っていました。同時に、人と人とを媒介する存在になったらいかなと、例えば茶の湯の世界では、やきものが一つのコミュニケーションツールとして機能していますが、そういった歴史的・社会的なやきもの役割についても考えていました。制作を始めた2020年はコロナ禍で、なかなか人と接触できなかったり、距離をとらなきゃいけなかったりと、抑圧された状況でした。ちやうど身体とやきものとの関係性を考え始めていた時期にもあたり、パフォーマンスの要素を作品に取り込んでいくこととしていたので、窮屈さみたいなものを感じていて。そういう状況について、もう一度考えられるような作品にしたいなと意識して作ったものでもあります。

身体 のイメージを 重ねた 生きている ような陶造形

聞き手／愛知県陶磁美術館 学芸員 入澤聖明
撮影／千葉亜津子

虚ろな陶造形に 身体性を見出す



《シーシュポスの柵欄》2025年

インタビューは国際芸術祭「あいち2025」愛知県陶磁美術館会場で（11月30日[日]に終了）。

Akane Saijo

1989年兵庫県生まれ。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻陶磁器分野修了。在学中の2013年イギリス・ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートに交換留学。やきものや吹きガラスが内部に空洞を持つ性質に身体との親和性を見出し、有機的な形状の陶造形を手掛けるとともに、作品と身体が呼応するパフォーマンスを実施する。世界各地の窯元などに滞在し、地元の伝統と史実に基づいた作品も制作している。

すべて《シーシュポスの柵欄》2025年



ザクロをモチーフにした作品の表面には、瀬戸と岐阜・瑞浪あたりで採れる土をひび割れるように焼き付けた。

入 国際芸術祭「あいち2025」では、国内有数のやきもの産地としての歴史がある瀬戸の愛知県陶磁美術館で《シーシュポスの柵欄》を展示しました。作品を通して表現されたことは何ですか。

西 今回は瀬戸でリサーチをしてから、リアリティを持って作れました。歴史などを調べていく中で「ここは労働者の町だ」という印象を強く持いました。かつて鉱山では人の手で土を掘り運び、成型して窯に入れて焼き、窯から出して売りに行くところまで、途方もない労働があったんだろうなと……。しかも、それを女性も

その土地の記憶が 息づく 作品とパフォーマンス



「瀬戸市新世紀工芸館」が手掛けたガラスのパーツは、やきもの部分との親和性を持たせるために、何度も調整を重ねた。



入 一連の作品を使ったパフォーマンスも行われました。今回は呼吸を出す音を出す作品と運ぶ作品があり、それはみんな労働と休息を繰り返す、人間の営みが成り立っているということ。日常の延長線上にあるパフォーマンスとして、9時半から17時まで起承転結はなく、その場の人によだねる挑戦をしました。やきものはそもそも触るものなので、作品に触れることは自然です。天井から吊るした作品がパフォーマンス後にしばらく揺れているのも面白いんです。

入 空間も含め、物と呼応しながらインスタレーションが組み上がっていました。

西 やきものの生産は、たくさんの人々が協働して行われてきました。今は個人主義の時代と言われていますが、そうい時代があったことも作品に投影できたらと思います。ただ、国際芸術祭「あいち2025」のテーマ「灰と薔薇のあいだ」には、人間中心の視点ではなく、地質学的な時間軸で世界を考察することを呼びかけていますよね。人間が労働するようになったのは、地球規模で考えたらすごく短い期間のことなのに、環境に大きな影響を与えてしまったとも考えられます。瀬戸でリサーチで、やきもの原料になる陶土もどんどん少なくなっているという話を聞いて、自分の表現をあと何年続けられるのだろうと自覚的になり、考えるきっかけをいただきました。

加わってやっていた。私も普段、20kgくらいある粘土を何個も運んだりしているので、シンパシーを感じて労働者の身体をテーマに据えました。作品を吊るす紐は荷造り用ロープのイメージです。瀬戸を拠点に活動した洋画家・北川民次が描いた労働者の絵もすごくいいんです。民次の絵にはよくザクロが出てくるのですが、民次のアトリエにも実際にザクロの木が植わっていました。ザクロには多産や繁栄といった意味があつて、瀬戸は大量生産のやきもので繁栄してきた町であることとメタファーのように重なって、心臓とザクロの木をモチーフにした作品を展示の中心に。陶土が採れる山々や燃料になる薪の束、窯の煙突が連なつた風景など、やきもの町の複合的なイメージからいくつも作品が生まれました。労働者の動きとか、ものや人が移動していく軌跡を残したいという思いを込め、床には絨毯を敷き詰めて、実際に作品を動かした跡が会場に残るようにしました。それに付随した映像作品も展示しています。